

月刊

書字文化

～日本書字文化協会機関紙 No55～

平成 30 年



4月号

編集長 渡邊啓子

一般社団法人日本書字文化協会

代表理事・会長 大平恵理

〒164-0001 中野区中野 2-11-6 丸由ビル 301

電話 03 - 6304 - 8212 FAX03 - 6304 - 8213

Eメール info@syobunkyo.org



目次

新検定への移行方法など決まる	2
新ライセンス制度 9月スタートへ	3
コラム「こころ」 大平 恵理	4
第7回総合大会指定課題決まる	5
東・西・南・北 竹内 茉永	6

解説付き指定課題一覧は 4月上旬にはホームページの総合大会欄に掲載します。

新硬筆検定の普及目指し

履修段級判定試験規則を5月発表

書文協は新硬筆検定（硬筆課題検定）の履修段級判定試験規則を定め、5月初めに発表することになりました。硬筆検定は現在、楷書と行書に分かれていますが、新硬筆検定はこれを一本化し、草書の学びも含めて硬筆の全体を120課題で濃密に速習するものです。ドリル効果が高い現行の検定は続行します。判定試験は移行期に伴う措置で、指導者ライセンスと連動した実力を着実に高めるためには第1課題からの履修を原則としています。新硬筆検定終了者は書文協とともに硬筆普及に取り組むことを期待しています。

硬筆重視に対応

これは、現在進められている高校学習指導要領改訂準備の中で、硬筆書写が高校国語科、書道科で重視される方向となることが明らかになったからです（当誌先月号参照）。硬筆が学校教育で重視されるようになり、書写書道の日常化、実用化が進むことに対応するための措置で、日本語の継承発展を活動の目標とする書文協は新硬筆検定の普及に力を尽くす方針です。

判定試験規則は10条で構成される予定で、編入試験と特別認定試験に分かれます。以下は、現在検討されている概要です。

編入試験と特別認定試験

<編入試験>

受付・対象 随時受付。現行硬筆検定受験者、他団体の硬筆段級保持者。
判定試験 新硬筆検定は、学習指導要領に合わせ学年相当制を取っています。テキスト第1巻は小学1年生相当、第7巻は中学1年生相当という具合。指導者ライセンスとの連動した実力を着実に高めるために、第1巻からの履修が原則です。しかし、教場の指導や本人の努力の成果を認める観点から、この試験を行うものです。試験の具体的なやり方は協議中ですが、試験は書文協本部が課題を指定して書いてもらう方法が有力です。

<特別認定試験>

受付・対象 6月、10月 教場指導者の判断により、学びの進捗で飛び級が妥当と思われる人。

◆**履修スタート課題、受験料** いずれも未定ですが、履修スタート地点は書文協が判定に基づき指定する案が有力です。受験料は、飛び級に伴うデータ処理などの経費をどこまで負担してもらうかがポイント。

新ライセンス制度 9月スタートへ

検定試験結果の累積との連動方式を改善

書文協で写書書道を学ぶ手段の基本は、検定と指導者ライセンス（資格）の受験にあります。一つずつ階段をクリアしていくことで、書写書道の技術を高めていきます。しかし、制度が細分化されて分り難くなっています。ライセンス制度は社会に理解され、評価を得ないと取得者にとって意味がありません。このため書文協は、検定成績の累積で決まるのではない、すっきりと分かり易い制度を9月からスタートさせることになりました。

検討の骨子は以下の通りです。忌憚ない御意見をお寄せください。

ライセンスの種類を精選

現在は検定の種類をベースに8種類の指導者ライセンスを発行していますが、数を絞り込みます。ライセンスは、その範囲でなら教える力があることを書文協が保証するものです。しかし、範囲が細かくなり過ぎると、生徒のためには「努力目標が増えますが、利用者にとっては汎用性が薄れ使い難くなります。

楷書、行書で一本化、大きくは毛筆、硬筆の2大柱とし、細字・連綿などは“カルチャー”部門としてまとめるなどの検討がなされています。

各ライセンスごとの等級は少なく 師範称号を付与

現在の指導者ライセンスはそれぞれ10段階に分かれています。これは多すぎて、ライセンスを分かり難くしています。指導者を求めるグループや団体にも分かり易い表示とすれば、ライセンスの利用拡大に役立つでしょう。

また、各指導者ライセンスには「師範」制度を確立します。これは、書文協と共に書写書道を普及させる勢力の拡大にもつながると期待しています。

移行方法・試験制度・費用などを研究

現在のライセンスは続行され、時間をかけて新ライセンスへの一本化を図ります。この際、新ライセンスへの移り替え方式が大事です。書文協としては教場指導者とよく協議のうえ夏には新ライセンスの詳細を発表する予定。その際、現行検定、ライセンスの費用についても見直しを行います。



こ こ ろ

大平 恵理(書文協会長)

風土と書写書道



いろいろな講習会で各地に出かけます。指導の先生方や子供たちに来て感じるのは、その土地々の特色。言葉がまず違います。女子カーリングの「そだねー」ではありませんが、イントネーションも微妙に違うのです。何もかも画一化が進む昨今ですが、地域の独自性が残っているのをはっきりと感じ、嬉しくなります。

大きく言えば、風土の違いを感じることもあります。例えば、書写書道で言えば、盛んであるか、そうでないか。進学競争に忙しくて、書写書道の学びどころではない意識が強い土地柄だ、という悩みを書塾の指導者らから聞かされます。それは都市部だけではありません。逆に、へき地でも長い伝統に守られて書を書くことに熱心な地域もあります。

こうした風土は、歴史と自然が作るのだと思います。歴史は人が生み出します。誰がどんな取り組みをしてきたか。その小さな取り組みが太い歴史となっていくのでしょうか。書塾は大概が小さな経営体です。収支のことに悩みながら運営に苦勞されている指導者らと話すたびに頭が下がる思いがします。

公共性を大事にし、日本語と良き伝統文化の継承発展を目指す書文協はこうした書の教場をつなぐ全国団体として発足しました。さまざまな風土の中で頑張る教場を支援していきたいと思います。同時に、多様な風土の中で生きる子供たちが自分の住む風土に誇りと愛着を持って交流し、切磋琢磨する場を提供していきたいと思います。

今回、全国書写書道大会特別賞の教育特別奨励賞の本数を倍増させました。特別賞に適う出来栄であることが必須ですが、同賞の半分を地域性を考慮した「希望枠」としました。書写書道の振興が難しい地域から出品された作品と人に光を当て、全国的交流を図る試みです。皆さまのご意見をお待ちします。

第7回総合大会指定課題決まる

課題一覧は4月初めホームページにアップ

第7回全国書写書道大会総合大会の指定課題が決まりました。

「ひらがな・かきかたコンクール」「全国学生書写書道展」「全国硬筆コンクール」とも指定課題のみで自由課題はありません。課題一覧は書文協ホームページ (<http://www.syobunkyo.org>) に近くアップの予定。フロントページ中ほどの横タスクバーの左から2番目「大会」にカーソルを当てると、掲載項目がスクロール表示されますので、総合大会の項目をクリックしてください。

「日本文化」を共通テーマに

文化には広い意味がありますが、この共通テーマでは衣・食・住のほか行事、言葉などを中心に指定課題を作成しました。日本が世界から理解されるためには、私たち日本人が日本をよく知らなくてはなりません。課題をきっかけに、教室で先生と生徒さんの間で日本の文化について語り合われることを期待します。(写真は十二単衣)



参考手本は4月下旬、評価の観点は5月末に発表

流派を超えた審査が書文協の理念です。手本通り書くのではなく、止め、はね、払いや点画など、身に付けなくてはいけないルール、技術をしっかりと手本から読み取ってください。文字の配置、配列も手本を参考にしてください。技法、ルールのポイントを指定課題文言にそってまとめた「評価の観点」も、書文協ホームページ上で発表されますので、参考にしてください。

手本は書文協ホームページに掲載されます。ダウンロードし使用は自由です。発売される見本手本（毛筆はA3判、硬筆はB5判、原寸大）は希望者には5月上旬から発売します。手本は1枚当たり毛筆100円、硬筆は40円。幼稚園・保育園・学校単位での応募は、応募者1人につき手本と清書用紙2枚を無料とします。送料はご負担ください。

東・西・南・北

母校の看板を書いたよ

都立昭和高校 2年、竹内 茉永（東京都羽村市在住）

「この看板は100年残るよ」。出来上がった看板を見にいった時、担任だった先生に言われた言葉です。

私は昨年3月、羽村市立羽村第一中学校を卒業の直前「あなたの字を気に入っているから、ぜひこの木に彫る学校名を書いて欲しい」と、校長先生から声をかけていただきました。今まで、体育大会や自分の卒業式などの看板を書かせていただきましたが、一生残るようなものは書いたことがありませんでした。だから、ずっと挑戦し続けてきた成果が実を結んだのだと実感しました。

時間がない中で書いていたため、文字の大きさやバランスが悪くなり、私にできるのかという不安もありました。しかし、啓子先生が夜まで残って私のために指導してくださったおかげで、最後には納得のいく文字が書けました。

完成した看板を見たり、看板の前で写真を撮ったという話を聞くと、とても誇りに思います。

これからも努力して練習し、様々な場面で結果を残していきたいです。



<編集部から>

同中学校のホームページにある学校だより57号に愛甲慎二校長先生が看板ができたいきさつを詳しく書いておられます。それによると、同校の創立71周年記念行事に合わせて製作を思いつき1年がかりで達成したものです。感動するのは、1枚板の立派な看板が書き手の竹内さんだけでなく多くの羽村市民の協力で作られたことです。その記念に、板の提供者、文字を板に掘り込んだ人、資金提供者の名前を書いた板の碑も作られました。それらは、地域が見守り、地域が育てる同中のシンボルとして職員玄関に飾られています。